シルク今昔ものがたり

102

炭俵（すみだわら）を運ぶ二千五百人の長い行列

今回の筆者

髙林 千幸

農林省蚕糸試験場をはじめとし、独立行政法人農業生物資源研究所を最後に、長年シルクに関する研究開発に従事。農学博士。日本シルク学会前会長。2011年より岡谷蚕糸博物館館長。

『え～！なに～？こんなことがあったんだ～！』これは、2022年12月20日の信濃毎日新聞の「あの時の一枚」に掲載された写真を見た瞬間の私の驚きの言です。岡谷市誌（中巻）を調べると、太平洋戦争中の勤労奉仕の欄に、「勤労奉仕による木炭の搬出」とキャプションのある同様の写真が掲載されていました（p.171）。あっ！これだと思いましたが、詳しい内容は記されていませんでした。

すると、今年になって、諏訪市の金子雅子さんが、この写真の実物を持って博物館へ来られました。金子さんは、以前から博物館へ何回もお見えになっていた方です。

この写真面には、万年筆でメモ書きがありました。達筆なため読み下せない字句があったので、長年教員をし、その後岡谷蚕糸博物館へ勤務されていた小口圭一さん（昭和9年生まれ）に読んでいただいたところ、次のように書かれていることがわかりました。

「昭和十九年二月岡谷工場ハ木炭不足ニ付キ私ハ産業戦士二千五百人動員湖南村（こなみむら）後山（うしろやま）へ行ける」

昭和19年といえば、敗戦色が次第に濃くなってきた太平洋戦争の真っただ中、物資が枯渇し燃料の入手もままならない時でした。若者は学生までもが戦地へ駆り出され、残った女性、子供、お年寄りが「産業戦士」として、兵器工場などへ動員されました。

この一葉の写真に映し出されている極寒の山道を黙々と炭俵を運ぶ姿。この炭は岡谷工場へと記されています。岡谷工場と言えばその当時は製糸工場か、軍需関連工場でした。

昭和4年の世界恐慌後、岡谷諏訪地方の製糸工場（特に輸出用生糸を製造していた器械製糸）は、廃業・転業を余儀なくされました。戦争中の製糸工場の統計データはまとめられていませんが、戦争に突入した昭和16年度と戦後の昭和21年度の製糸工場数、生糸生産量をみると、昭和16年の岡谷市内の製糸工場数は70社、戦後の21年には12社と17%に減じました。昭和21年の生糸生産量も戦前に比べ16%に減じました。とは言え、8万9千貫（334トン）もの生糸が生産されていたので、それ相応の燃料を必要としたのです。

戦時中、操業を停止したり、廃業した製糸工場は国の方針で軍需工場に転換し、航空機器、光学機器、木製機、通信兵器等の生産を行っていました。写真の説明文中には、「産業戦士」「動員」という言葉があります。この木炭の運搬は、国の統制下で子供・女性を動員し兵器をつくる軍需産業や製糸工場の燃料として使われていたものと推察されます。

昭和19年湖南村後山から岡谷へ炭俵を運ぶ長い行列

そして、私は金子さんに写真の上に説明文を書かれた方、そしてその文中の「私ハ」は、どなたかですかと尋ねたところ、父親の大久保貞夫さん（明治36年生まれ）とのこと。大久保さんは昭和17年7月1日から19年10月27日まで岡谷警察署長をされていたので、19年の2月に大久保さんによってこの写真面に記されたものとのことでした。

さて、当時の湖南村ですが、明治期には稲作や畑が中心で、それに適さない荒れ地や傾斜地、土手に桑を植えて養蚕が行われ、昭和初期まで桑園を拡大し産繭量の増大が図られました。湖南村後山は、標高1000mを超える山村で、寒天、氷餅、氷豆腐、藁（わら）細工、木炭製造、真綿づくりなどが行われていました。

戦時下、燃料が思うように手に入らない時代に、多くの人が行列をなして湖南村後山から峠を越えて岡谷まで炭俵を運び出す姿。人々が黙々と歩きながら抱く戦争の行く末や、出征兵士への想い、これからの生活のことなど、この一葉の写真から彼らの複雑な胸中が伝わってきます。

【参考文献】

長野県蚕糸課（1946）：長野県器械製絲工場調．

諏訪教育会（1966）：諏訪の近世史．

岡谷市（1976）：岡谷市史（中巻）．

湖南村誌編纂委員会（2017）：湖南村誌．